



## 意味の円環

ル・コルビュジェの1925~1928年の絵画と白の時代の建築から



villa savoy (撮影写真)



jean bonifas  
REGISTRATION ET COMPOSITION: R.C.S.B.

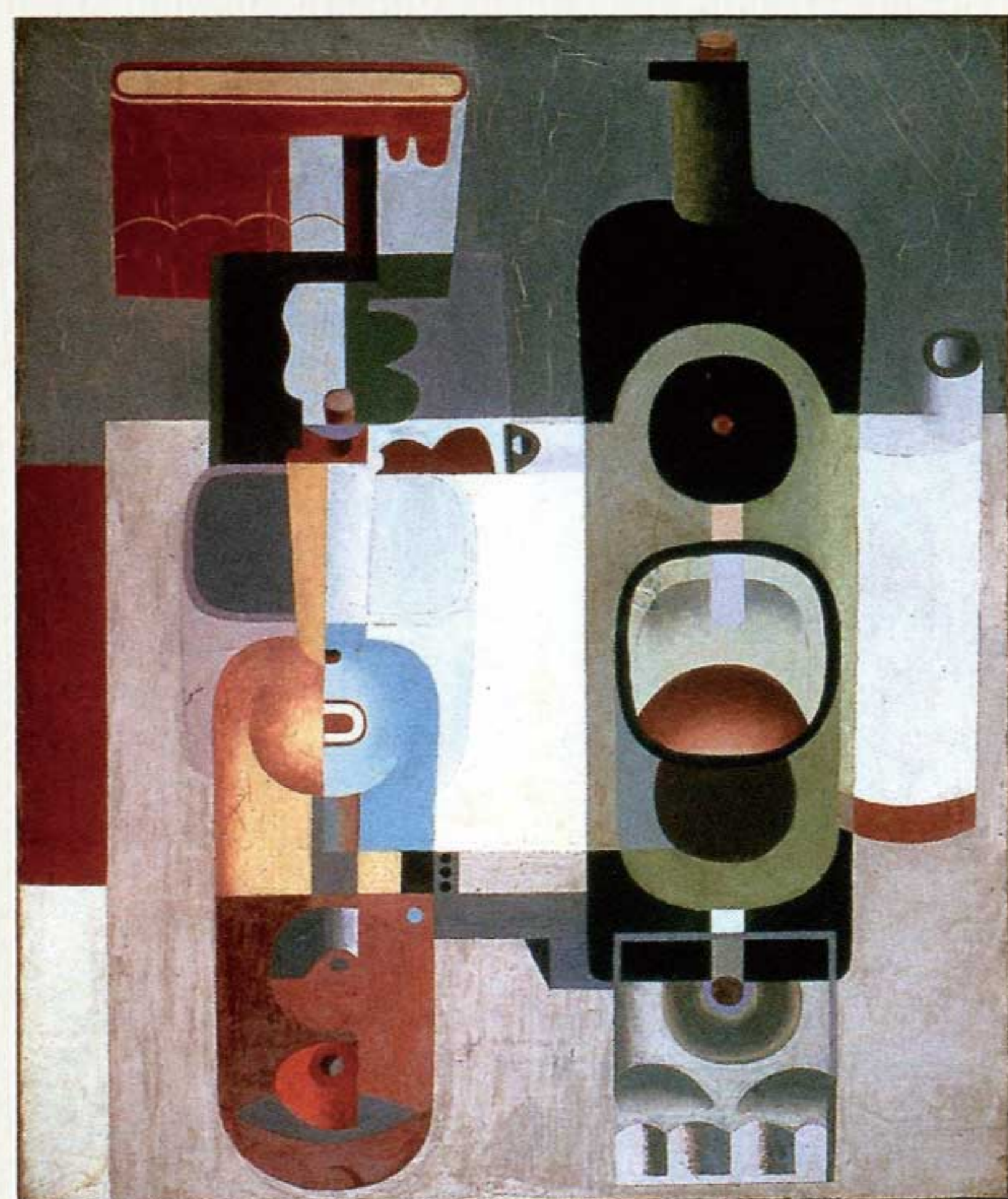
### ■きっかけ

ル・コルビュジェの白の時代の建築作品である、Villa la Roche-Jeanneuret, Villa Savoy, Immeuble Molitor et Appartement L.C. を体験して、洗面台や日光浴のためのベッド、シャワールームや暖炉、テーブル、ベンチなどの家具として認識している要素が、やたらと「目立って」いることが強く印象に残った。本来、建築を表現する上で、壁や床、構造体といった建築要素の下部構造とされ、生活を保障する上で最低限必要とされるであろう程度に置かれるものだと考えていた家具が、建築を構成する壁や柱、床などは切り離せない一体のものとして表現され、主張しているように感じられたのである。今自分が立っている場所から、距離が隔たった場所にある、家具にまどわりついた空間の中で時間を過ごす自分を想像させるような空間だった。そして、家具にまどわりついた空間に向かって精神が突き動かされ、引っぱられていくような感覚を受けた。そのような感覚がコルビュジェの建築空間に至るところで引き出され、実際の規模を超えて感じられる果てのないひろがりを感じ取れ、とても豊かな体験であった。また、引っ張られていくような感覚は、ジャヤ じられた。

### ■目的

ル・コルビュジェの絵画と建築との関係について考えることで、引っ張られるような感覚を持った空間を定義づけるとともに、そこから得た新たな知覚を自らの建築原価設計手法の一助とし、この場にいながらにして世界のひろがりを感じ取れるような建築、あるいは空間をつくりたい。

## 絵画の分析



deux bouteilles

©FONDATION LE CORBUSIER FLC152

## ピューリスム

Une oeuvre d'art est un association, un symphonie de formes consonnantes et architectures, tant pour l'architecture et la sculpture que pour la peinture.

「L' esprit nouveau no.4」 Aozenfant et C.E.jeaneret

芸術品は、建築と彫刻、絵画のための、構築/建築化された形態の交響曲であり組織されたものである。(筆者訳)

論考「ピューリスム」の中で、断片化された多視点から恣意的に描かれた対象のコラージュとして描かれたキュビズムを批判し「調和し、構築「建築化」された形態の数々が奏でるシンフォニー」として描かれるべきだとした。このジャンヌレ (ル・コルビュジェ) の言説を、絵画のコンセプトの本質が述べられたものとして、objet-type の「形態」とその《関係性》に注目した。

## objet-type / 絵画を構成するもの

ピューリスムは、機械を範例とした形状機能によって普遍性を獲得した形態をもった「objet-type (日常物証)」を対象としていた。objet-type を絵画の構成要素とすることで、対象が群れながらも一目でそれと分かるような形態の自律性を保っている。

「構築/建築化された形態」  
→「objet-type」= 機能によって固められた普遍的形態



## 見え方のズレ / 絵画の構成

ピューリスムに描かれた無数の objet-type は、注目する対象物によって次から次へと見え方がずらずと移り変わっていくように見えた。明快な形態をもった objet-type が重ね合わさることでジャンヌレの言う「シンフォニー」が現象しているのではないかと考えた。

「奏でるシンフォニー」  
→「形態の重なり合い」



注目する要素によって徐々に見え方が移り変わり、「ボトルB」→「ワイングラスB」→「水差し」→「ワイングラスC」→「グラス」が浮き上がって見えはじめていくように

## 絵画分析

既往研究、文献の調査から絵画を分類した。

ピューリスムのコンセプトを忠実に表現していた1918~20年までを「第一グループ」、要素の形態と関係性に变化の兆しが見える1921~24年を「第二グループ」、オザンファンと決別し、絵画にル・コルビュジェと署名し始める1925年以降も、ピューリスムのコンセプトが残っている1925~27年までを「第三グループ」、シュルレアリスムの影響が見えてくると、ピューリスムの宣言から完全に離れた時期を「ポストピューリスム」と分類した。ピューリスムからポストピューリスムへと変遷していく中で、ル・コルビュジェ自らの表現を獲得するに至る転換点として、最も重要と考えられる「第三グループ」の絵画を分析対象とした。

## 01.分析対象

グループ	年	作品			
第一グループ	1918	46. ヴァイオリン、グラス、瓶 47. 静物			
	第二グループ	1921	48. 立てられた本のある静物 49. 紫のサイコロあるいはい赤い瓶 50. 瓶、カラーフ、グラス 51. 瓶と本 (赤) 52. テーブル、瓶、本 53. 二本の瓶 54. 二本の瓶 55. カラーフ、コーヒーポット、アコーディオン 56. アコーディオンのある静物 57. ハイブのある静物		
		1922	58. 静物 59. 赤い静物 60. 黄色の静物		
		1926-27	61. ティーポットのある静物		
		第三グループ	1925	46. ヴァイオリン、グラス、瓶 47. 静物	
			第四グループ	1928-32	62. 静物 63. 静物 64. 静物

年	作品
1925	46. ヴァイオリン、グラス、瓶 47. 静物
1926	48. 立てられた本のある静物 49. 紫のサイコロあるいはい赤い瓶 50. 瓶、カラーフ、グラス 51. 瓶と本 (赤) 52. テーブル、瓶、本 53. 二本の瓶 54. 二本の瓶 55. カラーフ、コーヒーポット、アコーディオン 56. アコーディオンのある静物 57. ハイブのある静物
1926-27	58. 静物 59. 赤い静物 60. 黄色の静物 61. ティーポットのある静物

転記  
作品番号は「Le Corbusier catalogue raisonné de l'oeuvre peinte」  
Journé, N. et Journé, J.P., Skira, 2005, によるもの

転記 1  
私の最初の絵画は「(瓶)」と「瓶?」を示している  
Le Corbusier, New World of Space, Raynal&Hachcock, INC, 1948, p.11

転記 2  
1925年の絵画、直立する人、この絵画は図録に展示された。  
1925年から1934年、この絵画も外部に出た。  
15年間はほぼであった。」  
Le Corbusier catalogue raisonné de l'oeuvre peinte  
Journé, N. et Journé, J.P., Skira, 2005, p.368

転記 3  
「1925」と署名される『静物』は、一(中略)1925年冬  
画家ル・コルビュジェの出生とする1925年の視覚を示している。  
総合芸術家ル・コルビュジェの誕生、丸善出版、加藤道夫, 2012, p.93

転記 4  
1928年の初めに人体に向けての型を複製した。  
Le Corbusier, New World of Space, Raynal&Hachcock, INC, 1948, p.16

絵画作品分析対象

絵画作品対照表

## 絵画の分析

### 01.構成要素の抽出

1926年に描かれた「deux bouteilles (二本のボトル)」の分析を行った。ここに描かれたエレメントを可能な限り分解しながらその間にある関係性を読み解いていく。形態から物体を認識できる14つのエレメント「objet-type」と、形態から物体を認識できない5つのエレメントを抽出した。



### 02.重なり方の分類

分解されたエレメントは「objet-type」としての形態の独立性を保ちながら、隣接、または近接する他のエレメントの輪郭と重なり合い、形態に影響を受けていた。輪郭の重なり方によっていくつかの共通点がみられることから4つのタイプに分類した。

#### 「輪郭内包タイプ」

「ワイングラスA」の輪郭を上から辿っていくと、「ボトルA」の形態の内部へ入り込んでいく。内部へ入り込んだ「ワイングラスA」の底の輪郭の一部が「ボトルA」の内部と色色になり、区別がつきにくくなって一体になっているように見えるが、色彩の区別が明確な部分(「ワイングラスA」の持ち手の輪郭)により、おおよその形態の輪郭が想像でき、お互いが別のエレメントであることを認識できる。

#### 「輪郭回避タイプ」

一般的には幾何学形態をとる「テーブル」の輪郭が、右上部で半円上の突起が現れる。その下の少し離れたところに、飲み口を伏せられ逆さまにされた「ワイングラスC」の底の部分が「テーブル」の半円状の突起とほぼ同じ輪郭をもって描かれている。「テーブル」の輪郭が「ワイングラスB」の輪郭を回避するように円形の輪郭に沿ってカーブすることで、離れた位置に描かれたワイングラスの形態を認識できる。

#### 「輪郭霧散タイプ」

「カラーフ」の下部、朱色の帯の輪郭が、左に位置する「水差し」の輪郭に接している。互いの形態が一体となり、互いの色彩の違いが徐々に不明瞭になり、グラデーション状に解け合っていく状態に見えるが、「水差し」と「カラーフ」の輪郭の大部分が明確に描かれているため、お互いが別のエレメントであることを認識できる。

#### 「輪郭共有タイプ」

「ボトルB」の両側面の輪郭が、「水差し」の両側面の輪郭と一致しているが、上部と下部においてそれぞれの輪郭が別々に描かれることで互いのエレメントが認識できる。

このように、エレメント同士が部分的に同じ輪郭を共有し、一体化しながらも、互いの形態を大幅に崩すことなく成立することでそれぞれのエレメントの存在を認識できる関係の持ち方を「輪郭共有タイプ」と名付ける。

### 04.相互作用の網 / 考察

「objet-type」は隣接する複数の「objet-type」と重なり合いながら「形態を決定し合う」ような関係を持ち、その「形態を決定し合う」関係が網の目のようにネットワーク化していた。この関係性を「相互作用の網」と呼ぶ。この「相互作用の網」によって、「objet-type」がずらずとつながっていくように見え、次から次へと浮かんでいく「objet-type」の群れを前に、注目すべき視点を見失い、引張られていくように感じられたのではないだろうか。

エレメント	形態に重なり合っているエレメント	輪郭を決定するエレメント
「本」	ハイブ、B/A、B/C、B/E、B/F	ハイブ、B/A、B/C、B/E、B/F
「ハイブ」	ワイングラスA、B/A、B/C、B/E、B/F	ワイングラスA、B/A、B/C、B/E、B/F
「ワイングラスA」	ハイブ、B/A、B/C、B/E、B/F	ハイブ、B/A、B/C、B/E、B/F
「ボトルA」	ワイングラスA、B/A、B/C、B/E、B/F	ワイングラスA、B/A、B/C、B/E、B/F
「ワイングラスC」	テーブル、B/A、B/C、B/E、B/F	テーブル、B/A、B/C、B/E、B/F
「グラス」	テーブル、B/A、B/C、B/E、B/F	テーブル、B/A、B/C、B/E、B/F

全てのエレメントについて「重なり方」を分析、各エレメントの形態に影響を与えたエレメントと、形態変形のタイプを図にまとめている。

### 02.重なり方の分析

形態からオブジェを認識できる14つのエレメント「objet-type」と、形態からオブジェを認識できない5つのエレメントの「重なり方」に注目し、その関係を模型やPHOTOSHOPなどで分析・考察した。

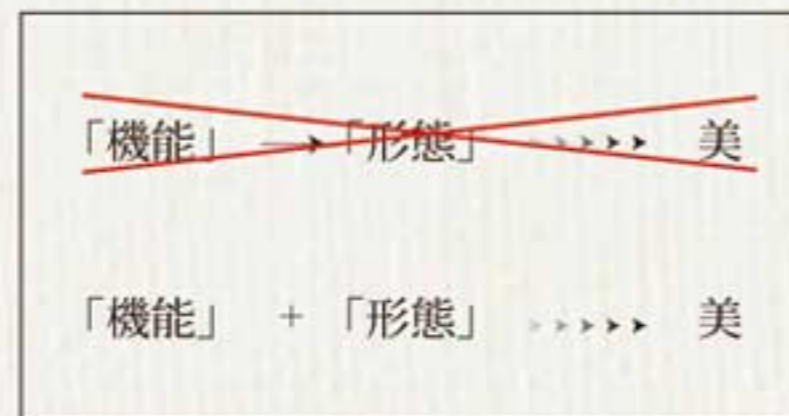


絵画の構成を図式化した。「objet-type」の形態を決定し合うように重ね合わせることで、「相互作用の網」が現象している。

「白の時代」の建築／「機能主義」について

コルビュジェは「L'esprit nouveau」no.8 (1921年5月)において「住宅は機械である」という言葉を使用し、「機械」を範例とする建築を主張していた。機能を要求されない絵画という芸術から発見した「相互作用の網」という様々なエレメント間における関係性が、この時期の「機能主義」建築と括られた作品に共通する可能性があるかをコルビュジェの言説から検証した。

ジャンヌレは、L'esprit Nouveau no.9で、機能的解決のみに向かう姿勢を、**機械（機能）としての合理性のみでは美を充分には表現し得ない**として批判したが、機能性による美が完全に排除された訳ではなく、「機能」は美をつくり出すための**十分条件として用意されていなければならない**とした。また、L'esprit Nouveau no.11-12では、建築の「形態」とそこから生み出される「関係性」こそが「美」を創り出す重要なコンセプトであることが明快に打ち出されている。絵画の分析から抽出された、「objet-type」の組み合わせによる形態の重なり合いによって、互いの形態を決定し合う「相互作用の網」という関係性が、建築の創作活動に影響を与えた可能性を示していることから、ル・コルビュジェの建築は、絵画で表現された「形態による関係性」に、美の必要条件である「機能」が加えられた創作活動であったと考えられる。



機能から生まれる形態が美しいのではなく、機能と形態との関係が美しきを生み出す

「建築家（若い）諸氏の決まり文句『構造をはっきり表さなければならない』、諸氏のもうひとつの決まり文句、『あるものが要求に応えるとき、そのものは美しい。』  
あるものが要求に応えるとき、そのものが美しいのではなく、われわれのほんの一部を満足させるだけであり、そしてそれは、それがなければ後の可能な満足もない最初の部分なのである」  
L'esprit Nouveau no.9. 1921年6月

「建築家は、形によって我々の感覚に強く働きかけて造形的感動を引き起こし、自ら創り出す関係によってわれわれのうちに深い反響を呼び起こして、われわれに世界の韻律との一致を感じさせる秩序の韻律を与える。それをわれわれは美と感じる。」  
L'esprit Nouveau no.11-12. 1921年11月

建築の分析



villa savoy

建築分析

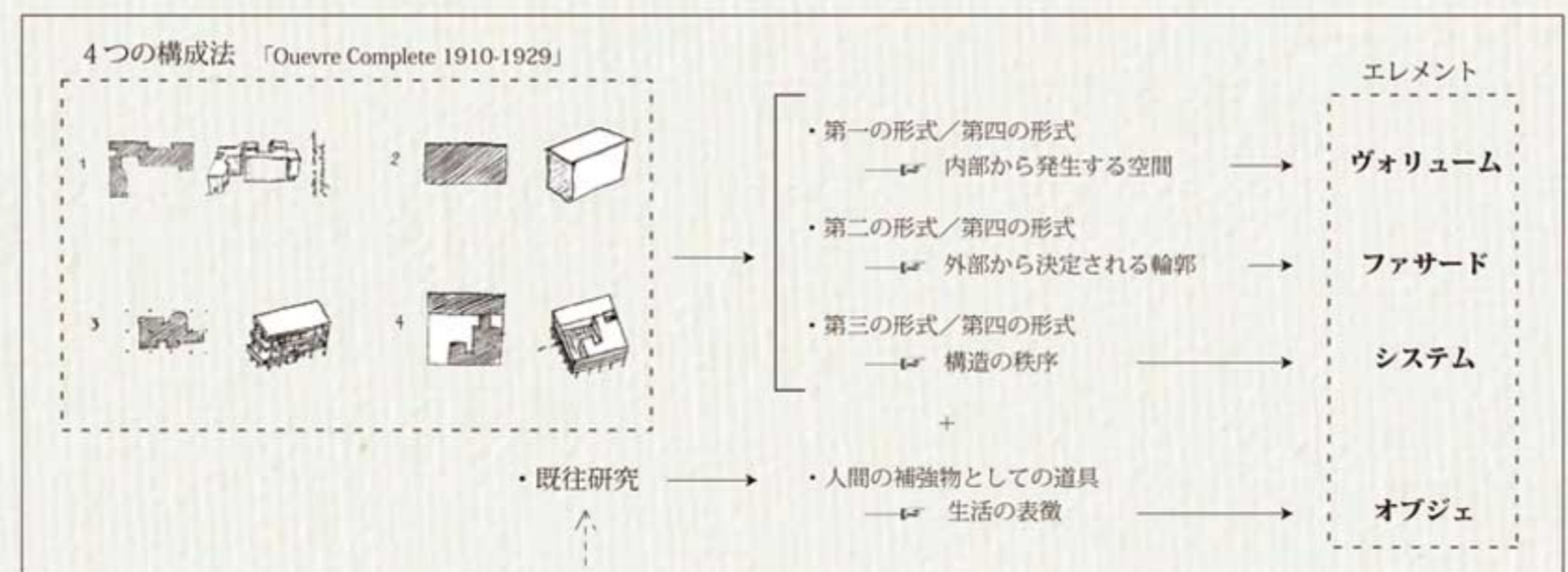
絵画の分析で明らかになった「相互作用の網」が建築においても現象するかを分析する。分析対象は絵画の「第三グループ」と同時期に「設計」されていた1925～28年までの建築作品とする。絵画におけるエレメントが様々な「静物」であったように、建築におけるエレメントを「ヴォリューム」「ファサード」「システム」「家具」の4種類とし、それらのエレメントが、絵画分析で現れた「内包」「回避」「霧散」「共有」などのタイプに回収されるか、またエレメント同士の間にも「相互作用の網」が現象しているかを平面から分析した。

01. 分析対象

1918	スイス	Villa Fallet	1905	スイス	Villa Fallet	1926	フランス	Armee du Salut, Palais du Peuple
1919	スイス	Villa Sauter	1907	スイス	Villa Sauter	1926	フランス	Villa Cook
1919	スイス	Villa Jaquet	1912	スイス	Villa Jaquet	1926	ベルギー	Maison Guiette
1919	スイス	Villa Favre-Jacot	1916	スイス	Villa Favre-Jacot	1926	フランス	Villa Stein / de Monzie
1919	スイス	Villa Jonasson	1916	スイス	Villa Jonasson	1927	フランス	Villa Church
1919	スイス	Villa Schavel	1916	スイス	Villa Schavel	1927	ドイツ	Villa Weissenhof Siedlung type-A type-B
1919	スイス	Cinema "La Scala"	1916	スイス	Cinema "La Scala"	1928	ロシア	Centrosoyuz
1919	フランス	Chateau de Sore	1917	フランス	Cine cineville	1928	チェコ	Villa Bezeau
1919	フランス	Cine cineville	1917	フランス	Cine cineville	1928	フランス	Villa Savoy
1919	フランス	Maison atelier Orandier	1917	フランス	Maison atelier Orandier	1929	フランス	Armee du Salut, Cas de Refuge
1919	フランス	Aménagement de la villa Benquet	1917	フランス	Aménagement de la villa Benquet	1929	フランス	Armee du Salut, Asile Buisson
1919	フランス	Villa Benquet	1917	フランス	Villa Benquet	1929	フランス	Villa de Mandrot
1919	フランス	Maison atelier Orandier	1917	フランス	Maison atelier Orandier	1930	スイス	Appartement de Bologniol
1919	フランス	Villa La Roche - Jeanneret	1917	フランス	Villa La Roche - Jeanneret	1930	スイス	Immeuble Clarte
1919	フランス	Villa Lullat - Mieschelanoff	1917	フランス	Villa Lullat - Mieschelanoff	1931	フランス	Pavillon Suisse, Cas Universitaire
1919	フランス	Villa Terribien	1917	フランス	Villa Terribien	1931	フランス	Immeuble Molitor et Appartement L.C.
1919	フランス	Villa Church	1917	フランス	Villa Church	1934	フランス	
1919	フランス	Pavillon de l'Esprit Nouveau	1917	フランス	Pavillon de l'Esprit Nouveau			
1919	フランス	Villa Franck	1917	フランス	Villa Franck			
1919	フランス	Lotissement de Lege	1917	フランス	Lotissement de Lege			
1919	フランス	Maison du Tonkin	1917	フランス	Maison du Tonkin			
1919	フランス	Appartement de M. G. D. P. G.	1917	フランス	Appartement de M. G. D. P. G.			
1919	フランス	Armee du Salut, Palais du Peuple	1917	フランス	Armee du Salut, Palais du Peuple			
1919	フランス	Maison Guiette	1917	フランス	Maison Guiette			
1919	フランス	Villa Stein / de Monzie	1917	フランス	Villa Stein / de Monzie			
1919	フランス	Villa Church	1917	フランス	Villa Church			
1919	ドイツ	Villa Weissenhof Siedlung	1917	ドイツ	Villa Weissenhof Siedlung			
1919	ドイツ	Pavillon Nestle	1917	ドイツ	Pavillon Nestle			
1919	ドイツ	Villa Bezeau	1917	ドイツ	Villa Bezeau			
1919	ドイツ	Villa Savoy	1917	ドイツ	Villa Savoy			
1919	ドイツ		1917	ドイツ				
1919	ドイツ		1917	ドイツ				
1919	ドイツ		1917	ドイツ				

02. 構成要素の抽出

これらの形式を、建築を構成する要素に置き換えて分類し直した。第一・第四の形式は内部から発生する壁面としての「ヴォリューム」による空間、第二・第四の形式は、外部から決定される「ファサード」による空間、第三・第四の形式は、骨組みなどに例えられる構造から決定される「システム」による空間と定義する。そこに、既往研究から、「装置としての家具」=「オブジェ」を建築を構成する4つ目の要素（エレメント）として挙げる。

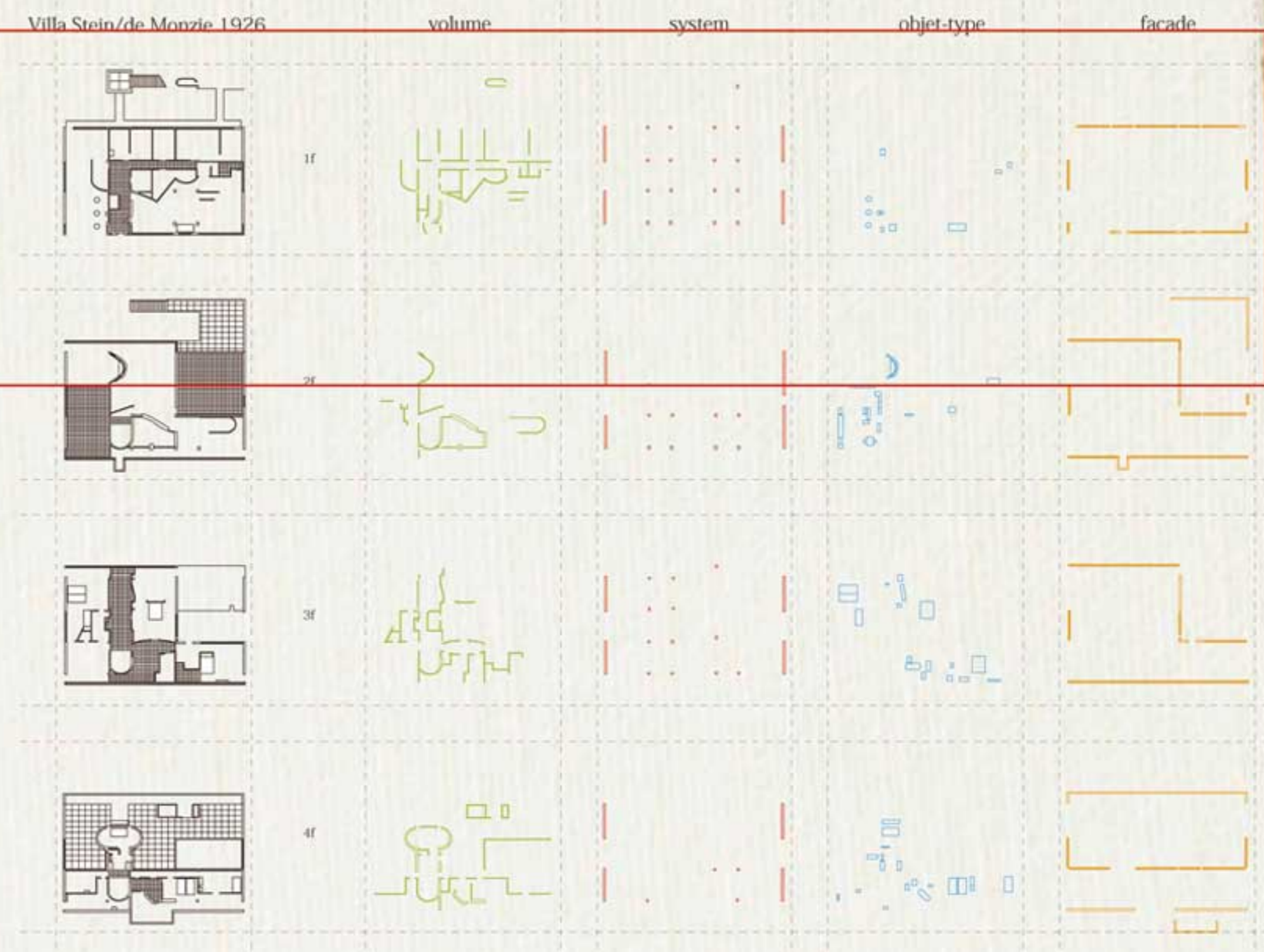


「住宅の中でそうした部分の形の装置が、決して全体の上位の架構の秩序の秩序の中に消失してしまわずに、刺激を与える動力源として相互に競いながらネットワークを組んでく建築的散策路によって結びつけられる手法が独特である。」  
「ル・コルビュジェ 建築の詩」  
発行社：鹿島出版会 著者：富永謙 発行年月日：2003.7.11

「家具は機能的・効率的『装備品（エクイップメント）』であり、『型式』=物 (objet-type)と同様、アノニマスであり、多様性を持ったものでなければならない。』  
身体を補足する装置 ル・コルビュジェの家具―ル・コルビュジェ 建築とアート  
その創造の奇跡 発行社：リミックス・ポイント発行年月日：2007.5.25

02. 重なり方の分析

4つの構成法と既往研究によって設定した構成要素「ヴォリューム（内壁）」「システム（構造）」「オブジェ（家具）」「ファサード（外壁）」を階層ごとに分解し、再構成しながら構成要素の形態の関わりについて考察する「形態的分析」と、機能的な関わりについて考察する「機能的分析」の2つの側面から分析を進めた。



＜機能的分析＞

「輪郭共有タイプ」  
1. system - volume  
構造である柱と非構造体の壁が輪郭を共有しているが、柱は非構造体の中心に位置する。また、非構造体の中心に位置する柱の中心に位置する。また、非構造体の中心に位置する柱の中心に位置する。

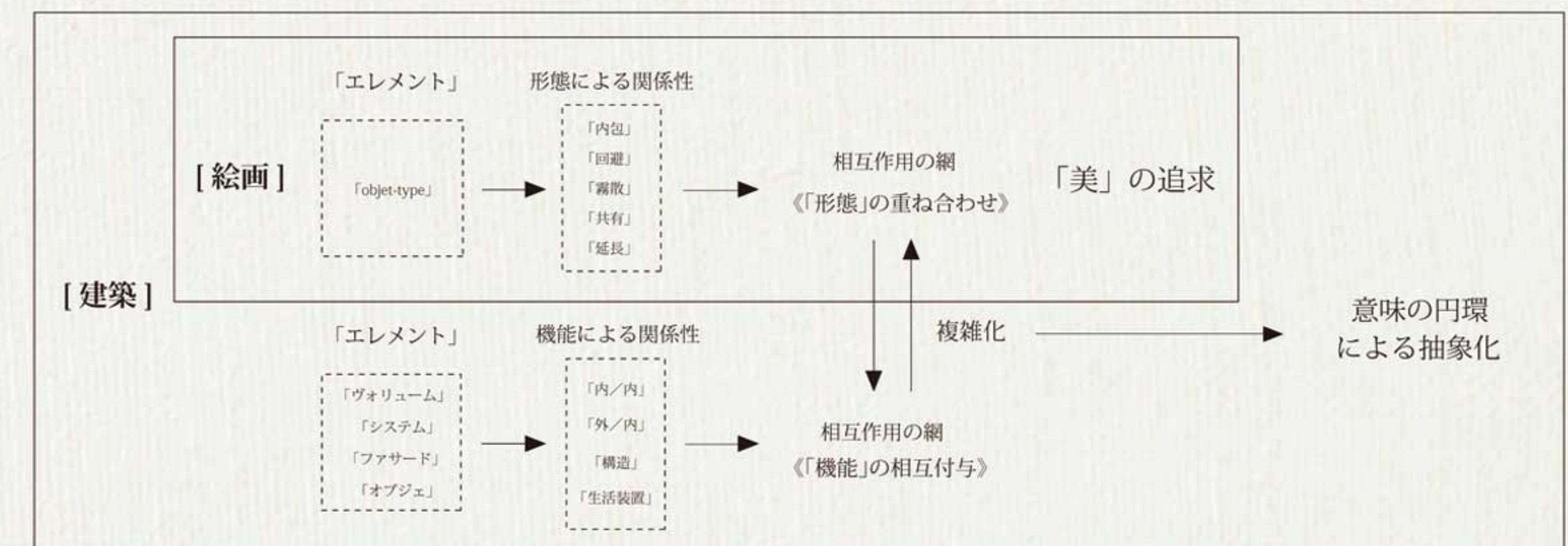
＜形態的分析＞

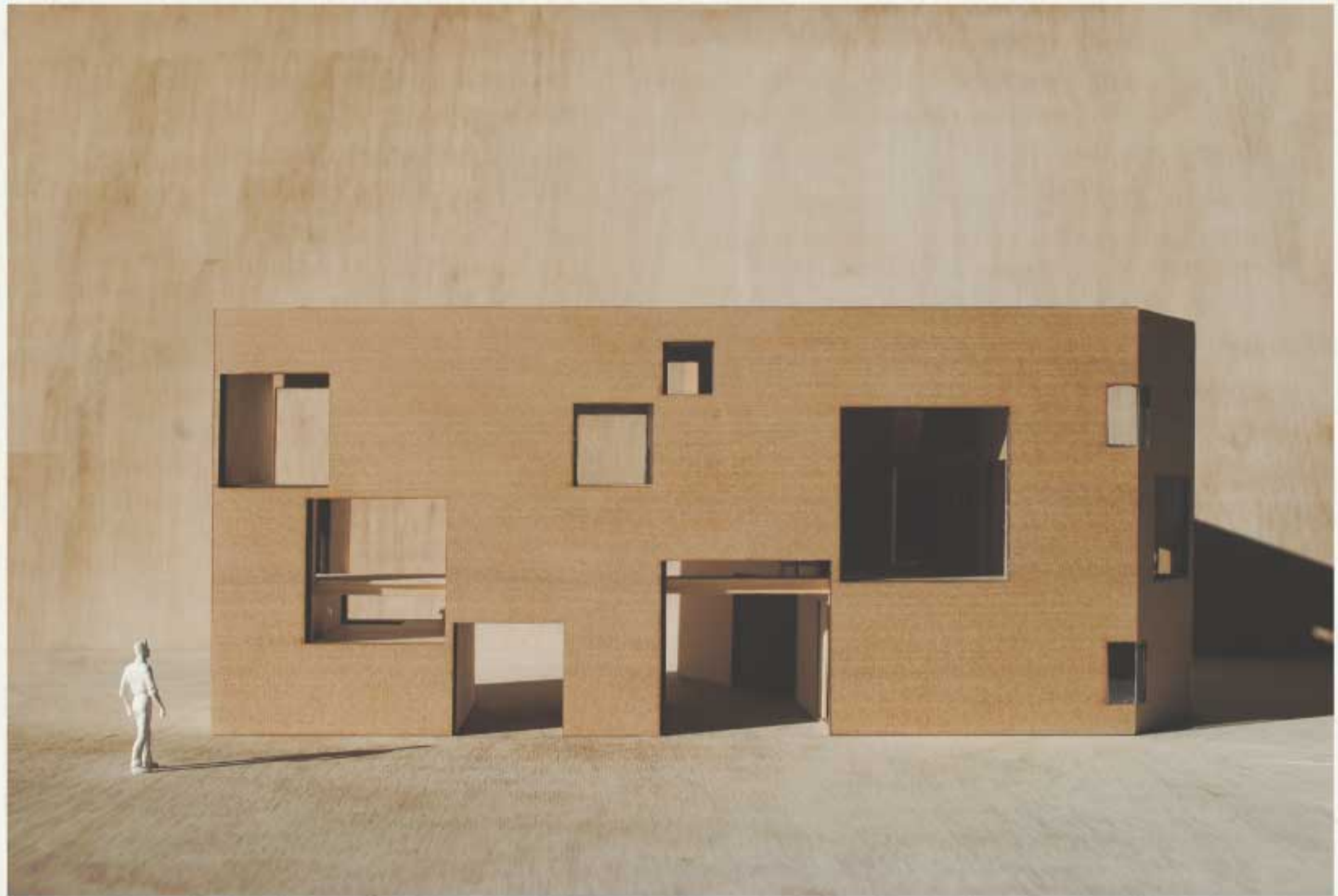
階層	「輪郭共有タイプ」	「輪郭内包タイプ」	「輪郭回避タイプ」
1F	1.1. system - volume 1.2. system - facade 1.3. system - volume 1.4. system - facade	1.4. system - volume 1.5. system - facade 1.6. system - volume 1.7. system - facade	1.4. system - volume 1.5. system - facade 1.6. system - volume 1.7. system - facade
2F	2.1. objet type - volume 2.2. objet type - facade 2.3. objet type - volume 2.4. objet type - facade	2.2. system - volume 2.3. system - facade 2.4. system - volume 2.5. system - facade	2.4. system - volume 2.5. system - facade 2.6. system - volume 2.7. system - facade
3F	3.4. objet type - volume 3.5. objet type - facade 3.6. objet type - volume 3.7. objet type - facade	3.2. system - volume 3.3. system - facade 3.4. system - volume 3.5. system - facade	3.1. system - volume 3.2. system - facade 3.3. system - volume 3.4. system - facade
4F	4.1. objet type - volume 4.2. objet type - facade 4.3. objet type - volume 4.4. objet type - facade	4.6. system - volume 4.7. system - facade 4.8. system - volume 4.9. system - facade	4.3. system - volume 4.4. system - facade 4.5. system - volume 4.6. system - facade

03. 考察

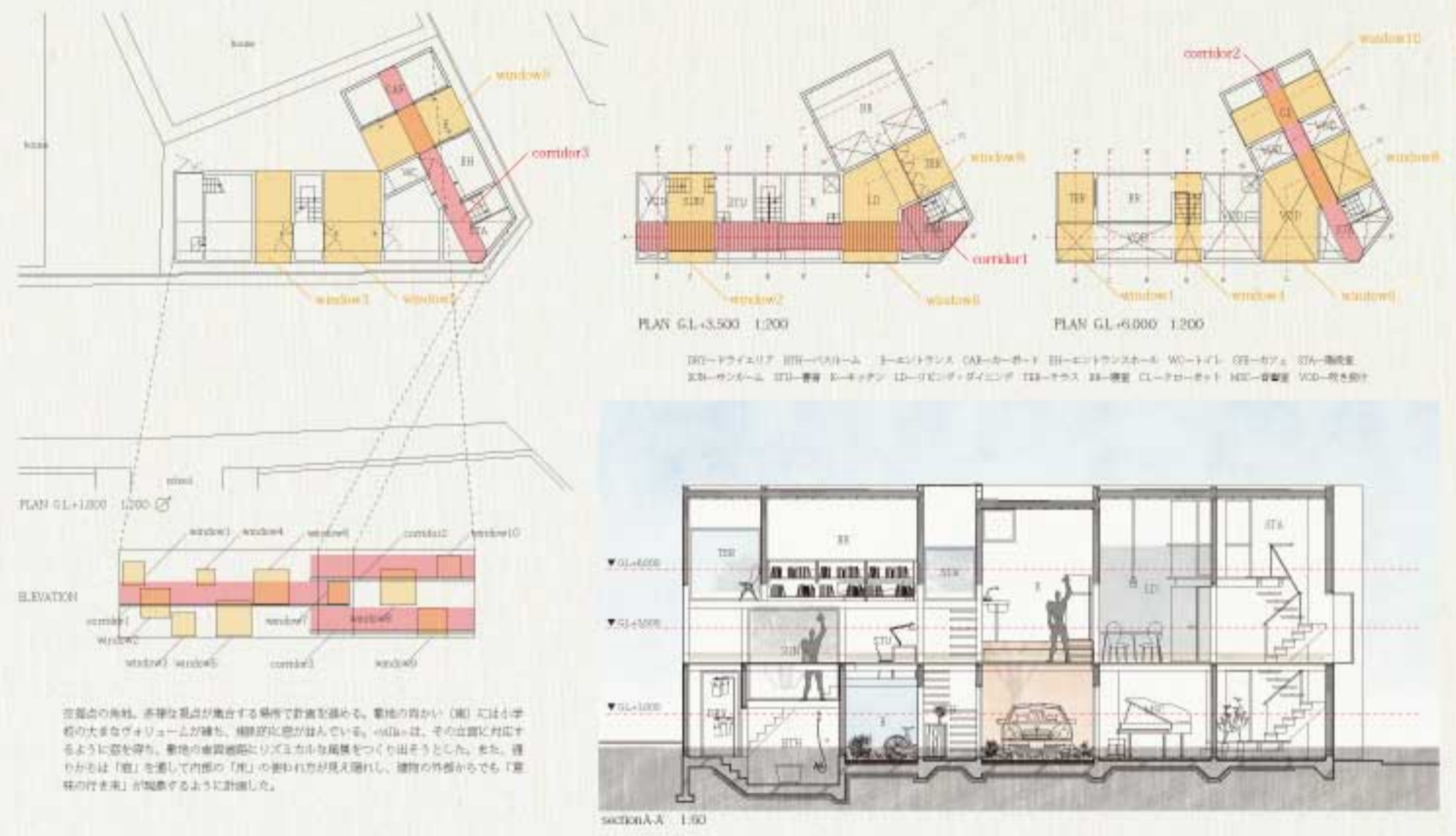
絵画と建築の関係 / 考察

「形態」の相互依存と「機能」の相互付与とが相互に働き合い「相互作用の網」がさらに複雑化されることで、様々な解釈を促す空間が1925年から1928年の間に設計されたコルビュジェ作品の持つ空間の特徴である。それは、複数のエレメントが関わり合うことによって「形態」と「機能」が、クルクル回るように変化し、互いに定義し合っており、定着しないような「意味の円環」を生み出す方法である。この「意味の円環」が、ル・コルビュジェの建築空間に想像上のひろがりを与えていたのではないだろうか。



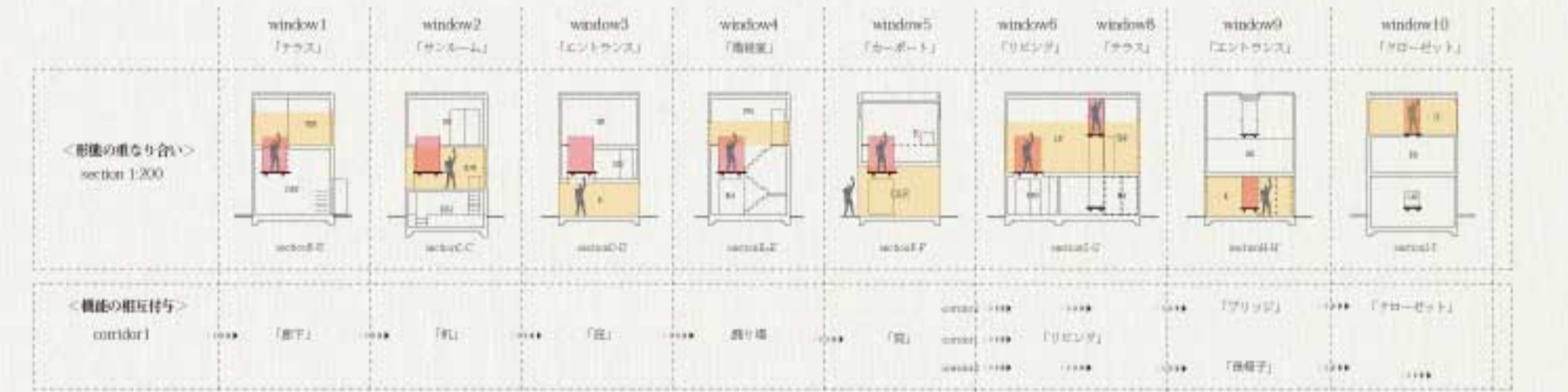


■ 平・断面計画

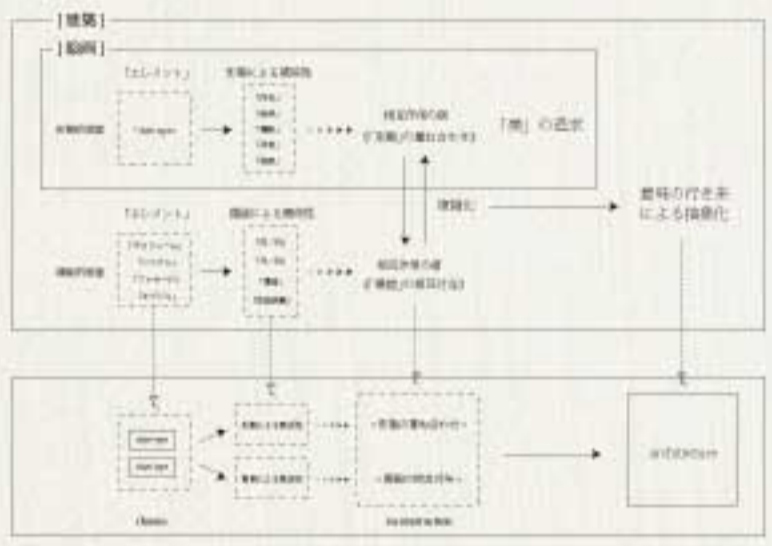


■ 構成要素の変化

3つの「床」と2つの「窓」の形態を組み合わせることで、それぞれの構成要素が様々な組み合わせを可能にするように変質していき、両者のリズムとともに「床」が様々な機能へと変質し、「窓」は、生活の中で常に実用とともなり存在として展開される。「床」と「窓」の相対的な関係性によって、様々な変態へと変化していくように認識され、(1)形態の組み合わせと、(2)機能の相対性による「相対作用の場」の中で変態化され、空間に特徴上ののびのびを与える。

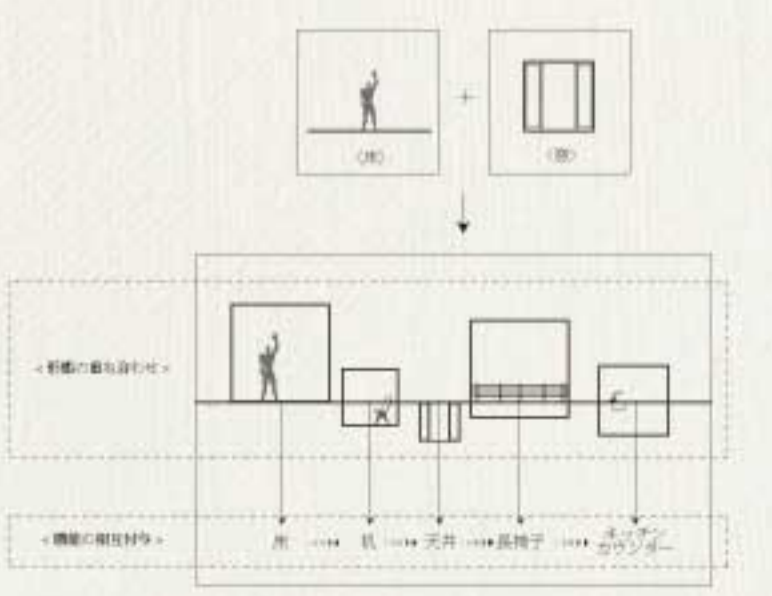


■ 設計の手順



「意味の行末」が現象する空間を先取りする。私たちの身のまわりに存在する建築のヴォリューム（=object type）としてのエレメントを抽出し、「対象物」の組み合わせと、「対象物」の相対性による「相対作用の場」を通じて、これらを生産していく。「意味の行末」する状態をもつ建築空間を、*stilla* として二世界の状態を生成する。

■ 空間モデル



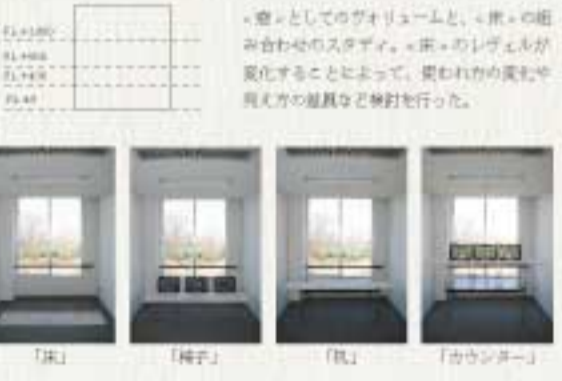
長く続く「床」。そこに様々な大きさを与えた「窓」としてのヴォリュームを組み合わせる。「床」は、「窓」との関係性によって「視」になり、「天井」になり、「階段室」になり、「キッチンカウンター」になる。



■ スタディ 1



■ スタディ 2



■ スタディ 3

